

65 Should条件文の表す開放条件と仮想条件

未来の出来事を表す条件文には (1a, b), (1c, d), (1e, f) の4種類がある。柏野(2018)によると、話し手や文脈によるが、それぞれの条件文はその意味内容の実現可能性がやや異なる。(1a, b) は直説法現在 (indicative present) で開放条件 (open condition)，つまり、話者は文の意味内容の実現可能性について中立的で、単に実現するかもしれないと考えている。ところが、(1c-f) は仮定法過去 (subjunctive past) で仮想条件 (hypothetical condition)，つまり、話者は文の意味内容の実現可能性がないか少ないと考えている。

- (1) a. If it rains tomorrow, the game will be cancelled. [60%]
- b. If it should rain tomorrow, the game will be cancelled. [40%]
- c. If it rained tomorrow, the game would be cancelled. [30%]
- d. If the earth exploded, no one would survive. [0%]
- e. If it were to rain tomorrow, the game would be cancelled. [20%]
- f. If the earth were to explode, no one would survive. [0%] (柏野 2018: 78)

仮想条件を表す (1c, d) の仮定法過去の条件文と (1e, f) の were to 条件文の実現可能性の差が10%あるが、大きな差ではない。問題は (1b) の should 条件文が開放条件を表すにもかかわらず、実現可能性が40%と中途半端で、しかも、(2) のように仮想条件にもなり得ることである。実際、Carter and McCarthy (2006)によると、(3) のように、should 条件文は were to 条件文と仮定法過去の条件文と同様に仮想条件をも表す。(1c, d) の仮定法過去の条件文は堅い (formal) 表現とされる should 条件文と were to 条件文の両者の意味内容を含意すると言える。

- (2) What a pity it would be if John should leave out team! (Declerck 1991: 435)
- (3) I'd hate it if anything were to happen to them. (or: I'd hate it if anything happened to them/if anything should happen to them.)

(Carter and McCarthy 2006: 665)

Declerck (1991: 435)によると、should 条件文の should は「偶然や何らかの予測不能な要因」(chance or some other unpredictable factor) によって文の意味内容が実現可能となることを示唆する。(4) の I'm not expecting any calls の部分は「誰かが電話をかけてくる」という不測の事態を should が含意する裏付となる。また、Hewings (2013), Eastwood (1994) と Swan (2016: 244. 1) は (5) のように should が happen (chance) to, should happen to と同じか、類似の意味を表すと指摘している。さらに、Graver (1986: 91) は should を by any chance と置き換えて、意味は

同じだと述べている。

- (4) I'm not expecting any calls, but if anyone **should** ring, **could** you take a message?
 (Eastwood 1994: 338)

- (5) If you **happen** to be in our area, drop in and see us. (or If you **should** [happen to] be ...) (Hewings 2013: 168)

(6) は映画 *Mission Impossible* で秘密指令を受け取る場面だが、このような偶然性や不測の事態を示唆する should の倒置が効果的に使われている。

- (6) Kittridge (off screen): As always, **should** you or any member of your IM Force be caught or killed, the secretary **will** disavow all knowledge of your actions.
 (Transcript. *Mission: Impossible*. 1996.)

should 条件文の帰結節は (1b), (5), (6) のように命令法や直説法となることが多い。これは不測の事態が起こった場合にどう対処するのか話者が意識していることの表れである。逆に、(2) – (4) の帰結節が仮定法過去となるのは実現可能性がむしろ少ないだろうという話者の意識の表れである ((4) は仮定法過去による実現可能性の少なさを利用した丁寧表現)。したがって、should 条件文は開放条件と仮想条件の間を行き来できる文と言える。

- (7) If the sun ***should** (**were to**) rise in the west, I **would** never forsake you.

(河上 1996: 448)

(3) のように、仮定法過去の条件文と should 条件文、were to 条件文はどちらも仮想条件を含意できるが、(7) の場合、不測の事態や偶然性を含意する should は容認されない。柏野 (2012: 135) によると、これは were to 条件文が根拠のない想像の世界を表現できるためである。つまり、「太陽が西から昇る」のは非現実的な SF 小説か寓話の世界以外にあり得ない ((1d, f) も同様)。

- (8) If the North Sea **froze** in winter, you **could** walk from London to Oslo. (but probably not if the North Sea **should** (**happen to**)/**happened to** freeze in winter ...)
 (Hewings 2013: 168)

(8) で、Hewings (2013) が “but probably not” と述べているのも should 条件文が不測の事態や偶然性を含意することが関わっている。北海が凍結することなど絶対にあり得ないからである。

(女鹿 喜治)